2024 年 7-9 月

20240826
先週末（24-25 日）、武藤祥、山崎望両氏を代表とする「自由民主主義の裏面史研究会」の研究合宿に出てきた（一時悪化していた座骨神経痛がやや軽くなってきたので、足腰を庇いつつ、何とか無事に行くことができた）。
第 1 報告は、西山隆行氏の「アメリカにおける秩序と暴力」。2021 年 1 月 6 日の連邦議会議事堂襲撃事件に象徴される暴力の問題を取り上げて、「自由民主主義と秩序」という問題を取り上げるもの。民主政治も秩序維持を前提するのではないかというダールへの疑問から出発して、①物理的暴力、②思想にかかわる問題、③ナショナル・アイデンティティという 3 つの角度からアメリカ史を振り返った（但し、②は省略）。③では「白人のキリスト教ナショナリズム」という概念が興味深かった。複合的な問題提起で、全体としての見通しを得るのが難しいところがあったが、討論では多くの参加者たちから興味深い意見が出されて、充実した討論になった。私も、報告で省略された②に関して補足的な質問をさせてもらった。
第 2 報告は、立石洋子氏の「ロシアにおけるナショナリズムと排外主義」。帝政期およびソヴェト期から始まって、1990 年代、21 世紀、そして 2014 年以降という時代を追って、民族的アイデンティティと市民的アイデンティティの関連や多数の排外主義運動について豊富な情報を提供する報告だった。丹念な調査に基づいて、多様な情報を伝えてくれたのは大いに多とすべきだが、やや全体としての見通しが利きにくい観があったので、私から簡単な補足説明を行なった。参加者たちから各種の意見が出されて、これも充実した討論になった。
この 2 報告をめぐる討論の他、研究会全体の今後の方針についても議論され、また懇親会では世界および日本の政治・政治学をめぐって多様な意見が交換された。若い人たちを中心とする研究会に私のような年長者が紛れ込んで何ほどのことができるかという不安もあったが、とにかく私にとっては有益な機会だった。

20240910
宮地尚子『環状島＝トラウマの地政学』（みすず書房、2007 年、新装版、2018 年）という本を読んだ。あまりよく知らない著者による、あまりよく知らないテーマの本だが、読んでいて、目からたくさんの鱗を落とされる思いをした。「環状島」という比喩的表現は、「内海」と「外海」の間にドーナツ状に存在している島を指している。その島には山があり、内海から尾根に向かっては「内斜面」があり、尾根から外海に向かっては「外斜面」がある。このモデルにはいくつもの意味があるが、何よりも重要なのは、深い内海に沈んだ犠牲者たちは発言することができないということである。何事かについて考える場合、中心に近い位置にいる人ほど事態をよく知っていて、発言しやすいと思われがちだが、実は中心そのものにおいては、当事者は死んでいたり、その痕跡さえも抹殺されたりしていて、自己を主張することはできようもない。そこからやや離れた「波打ち際」まで来てはじめて、なにかを語ることができる。このことは、トラウマについて語ったり考えたりする際につきまとう困難性と関わる。トラウマの重い被害者は、その経験を語ることができ

ないことが多い。それほど重くない当事者とか、その身近にいる人、あるいは支援者、研究者、ジャーナリスト等が語ることがよくあるが、それはどこまで真に迫っているのかという疑問にさらされる。「環状島」というモデルは、このような困難性を踏まえて、だからといって何もできないわけではないと考えるために提出されている。「内海」の現実には誰も迫ることができないが、そのことを必ずしも否定的に捉える必要はない、「見えないもの、聞こえないものがあることに気づけば、そこから逆に、たくさんのことが見え、聞こえてくる」と主張されている。どこまで本格的に読み解けたか覚束ないが、読書ノートを書いて、私のホームページ上にアップロードした。

20240915
昨日、社会運動論研究会のオンライン会合に出席した。
①前半は、ベアタ・ボホロディッチ『連帯の政治社会学── 3.11 後の反原発運動と市民社会』合評会。著者による報告（ポーランド人研究者だが、日本語で発言）、佐藤圭一氏によるコメント、二人の訳者（小熊英二、木下ちがや両氏）による補足発言と総合討論という構成。私はこの本を読んだことがなく、予備知識も乏しかったが、興味深い討論だった。たまたま同じ日に朝日新聞に書評（隠岐さや香氏）が載り、またこれも時を同じくして、小森田秋夫氏がフェイスブックで本書に触れていてタイムリーだった（小森田氏はこの合評会にも参加していた）。
書物は多様な部分からなる「反原発エコシステム」を描き出すもので、直接行動は「花」に当たるが、それ以外の部分に注目することで活動の効果の多層性を指摘し、直接目的は達成されなかったが、より厳格な安全基準の導入などの成果があったと論じるもののようだった。佐藤圭一氏のコメントは、「エコシステム」概念の重要性に着目し、これまでの運動研究がどちらかといえば「花」に目を向けがちだったのに対し、より地味な団体の関与を追跡したことの意義、とりわけ「運動は盛り上がったけれども、結局は何も変わらなかった」というシニカルな観点への批判を提起していることを指摘し、多様な貢献のあり方のカタログ化という評価を示した。小熊、木下両氏の発言は異なる観点からのものだが、それぞれに興味深い論点を提示していた。もっとも、私がこの二人の議論に全面的に納得したということではなく、若干の違和感も残ったが、それは今後の課題だろう。
②後半は、松井隆志『流されながら抵抗する社会運動 —— 鶴見俊輔「日常的思想の可能性」を読み直す』合評会。著者による報告と成元哲氏によるコメント。私は本書について、かつて感想を書いたことがある。社会思想史として鶴見俊輔を取り上げる議論は数多いが、本書はそれらと違って、社会運動の観点からのもの。対象書籍をかつて読んでいたため、著者の報告の大筋はあらかじめ見当の付くものだったが、早い段階ではあまり鶴見に強い関心をいだいていなかったこと、晩年の鶴見はあまり好きでなく、他の人たちが好きな鶴見像への反感を足場とした鶴見論を出したと述べた点は新鮮に感じた。討論は多岐にわたり、私もベ平連内の諸潮流について質問を出させてもらった。最後の方で小熊氏は、どうして著者は鶴見を取り上げたのかという疑問を執拗に提起していたが、もともと著者は鶴見論を主題としたわけではなく、鶴見を一種のダシとして独自の社会運動論を書いたのだとすれば、この疑問はあまり大きな意味を持たないのではないだろうか。終わりの方で、研究会の中心的組織者である樋口直人氏が、2016 年社会学会大会の裏話に関する逸話を

披露してくれたのが面白かった。

20240927
スピノザに関する書物を二冊読んだ。
まず、吉田量彦『スピノザ――人間の自由の哲学』（講談社現代新書、2022 年）。これは生涯と思想の両面にわたって分かりやすい解説を施した本。これほどにも難解な内容について、これほどにも分かりやすい文章を書くというのは驚異的な才能だと感じた。続いて、国分功一郎『スピノザ――読む人の肖像』（岩波新書、2022 年）。これはいくつかの主著について突っ込んだ読解を試みた書物。その分、難しい本であり、読んでいて「ここは全然分からない」と感じさせられる個所もあるが、「ここは何とか分かりそうだ」と感じる個所もあちこちにある。この二冊をこの順で読んだことにより、これまでまるで見当の付かなかったスピノザの思想が何となく親しみの感じられるものとなってきた。彼の有名な言葉「笑わず、嘆かず、呪詛もせず、ただ理解すること」（私にとっては、トロツキーによるパラフレーズ「泣くな、笑うな、理解せよ」の方が馴染み深いが）が本来どういう文脈にあったのかもある程度分かってきた気がする。